二〇二一年三月六日

樹間洩る陽の径ゆけば春の湖　よう子
隧道を出れば海峡風光る　うつぎ
裸婦像の肩が気に入り雀の子　よし子
荒東風の架橋ハンドル盗られまじ　うつぎ
クロッカス咲かせ引戸の時計店　素秀
ひとときを梅花に舞ひて風花す　はく子
剪定を終えたる庭に日差し満つ　よし子
蕗味噌や白きが眩し割烹着　凡士
竹筒に百円硬貨春野菜　かかし
豪商の軒に古巣の長屋かな　なつき
梅日和昨夜の雨溜む鎖樋　こすもす
山茱萸の黄を抱擁す日差しかな　わかば
防火用バケツを倒す春疾風　せいじ
芹の水掬ひ心も洗はるる　むべ
杖数多され百寿てふ梅満開　かかし
微笑せるごと木蓮の開きそむ　せいじ
引鶴の松原抜けて脚揃ふ　素秀
春雨や男根に似し道祖神　なつき
竿立てて客待つ船頭湖おぼろ　よう子
ゆくりなき初音に次の声を待つ　わかば
小流れのささやき初めし犬ふぐり　うつぎ
手櫛もてなほす雛の乱れ髪　なつき
供花浸す閼伽桶の水温みけり　素秀

毎週句会秀句・みのる選・二〇二一年三月七日